翻訳で読む夏目漱石

――英訳とドイツ語訳を例として――

徳　永　光　展

1　はじめに

国際化が進む時代における日本文学研究[1]にあっては、海外の研究動向にも目を配ることが必要となってくる。日本の文学作品も近年では、その読者層が広く海外にまで及んでいる[2]からである。読者が日本語母語話者であれば、時代や境遇の差から主として生じる作品解釈の幅というものが当然確認できよう。一方、日本語を理解する日本語非母語話者や日本語を全く理解せず、専ら翻訳を通して作品に接する読者であれば、文化の差があってこそ生じる読み、日本人読者には見られない独特の受容の仕方や異文化理解の際に避けられない変容が含まれた読まれ方になることも容易に想像されるところである[3]。そこでは、読み方の可能性がより開かれていくと言ってよい。翻訳者は　日本語原文と目標言語の間を往還しながら激しい葛藤を経験しているものである[4]。よって、そのような翻訳者の労苦に目を向けながら、文化変容の様態を論じようとする翻訳研究も、日本文学の外国語訳研究という形で近年蓄積を見つつある[5]。

本稿もそのような問題関心の系譜に位置付けながら、夏目漱石作品[6]の英訳[7]とドイツ語訳[8]を主な例として、日本語原文を翻訳する際に生じる変容の様態を提示し、考察を加えようとするものである。

2　暗喩としてのタイトル

処女作『吾輩は猫である』のタイトルは、英訳では I am a cat[9]〔私は猫です〕、ドイツ語訳では Ich der Kater[10]〔例のあの猫〕となっている。書き出しの「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」[11]の英訳は、I am a cat. As yet I have no name.[12]〔私は猫です。まだ私には名前がありません。〕であるが、ドイツ語訳はタイトルからは少々異なっていて、Gestatten, ich bin ein Kater! Unbenamst bislang.[13]〔すみません、〔雄〕猫なんです。今まで飼い主なし。〕との訳出がなされている。ドイツ語では名詞が男性か女性かまで表現する。この猫は、雄という前提で始まるが、「吾

輩は猫である」という日本語原文での語り方は男性特有のものであるため、その傾向を冒頭で明確化することに役立っている。

それでは、『坊っちやん』における江戸っ子の語り口は果たして外国語で表現され得るものなのであろうか[14]。目標言語の首都で若者が現在使用している言葉に翻訳すれば解決が着くという類のものではあるまい。『坊っちやん』は英訳が5種類[15]、ドイツ語訳も2種類[16]と翻訳には恵まれた作品であるが、タイトルは英訳ではすべてBotchanのままである。ちなみに、初めての翻訳であった毛利八十太郎のみが副題としてmaster daring（坊っちゃん）を添えている。一方、ドイツ語訳では、アレキサンデル・スパンが副題として、Ein Reiner Tor〔「全くの馬鹿」、さらに言うなら「お人好し」〕を添えた。Torとは馬鹿という意味を表す単語である。一方、ユルゲン・ベルントと篠原正瑛による共訳では、Der Tor aus Tokio〔「東京出身の馬鹿」、「東京からきた愚か者」≒「江戸っ子〕なる思い切ったタイトルが採用された。

『草枕』のタイトルはアラン・ターニーの英訳がThe Three-Cornered World[17]（三隅の世界）、クリストフ・ランゲマンのドイツ語訳がDas Graskissen-Buch[18]（草枕の本）といずれも訳出を試みているのに対し、メレディス・マッキニーの英訳ではKusamakura[19]とそのままローマ字表記された。アラン・ターニーは「*Kusa Makura*とは、字義的には*The Grass Pillow*となり、日本の詩歌では旅を意味する標準的な言葉である。このタイトルを直訳してしまうと、英語の読者には原語の含蓄が全く伝わらないので、私は本文の中からこの本の趣旨を表していると思われる言葉を引用するのがよいと思った。」[20]と述べる一方、メレディス・マッキニーは「この小説は以前、アラン・ターニーにより*The Three-Cornered World*という第3章に登場する一風変わった作家の姿を参考にしたタイトルで翻訳された。邦題の*Kusamakura*（字義的には“grass pillow”）は、伝統的な文学用語で、芭蕉の「奥の細道」に典型的とされる詩的な旅を連想させる。私はオリジナルな日本語のタイトルを保持することを選択した。」[21]との説明を試みている。

他方、ドイツ語訳者のクリストフ・ランゲマンは、さらに詳しい解説をあとがきで以下のように試みている。

> 公刊された小説のタイトルは、原文ではKusamakuraとなっている。夏目漱石（1867-1917）による他の多くの作品タイトルと同様に、この作品もドイツ語で言い表すのは難しい。Kusamakuraは„Gras-Kopfkissen“〔草の枕〕または„auf Gras gebettet“〔草の上に寝た〕といったような意味である。これは、

日本における最古の文芸作品にすでに見られる詩的なトポスであって、誰かが旅か放浪で外にいて、家に泊まるのではなく、可能な限り絵のように草が生えた自然の中で夜を明かすという事実をほのめかしている。この言葉には、二重の意味がある。一方では、旅人は少なくともしばらくの間、日常生活で苦しめられるかのように感じるしがらみや、馴染みのある周囲の人々との関係から解放され、ゆとりの中で創造性を発揮できる。他方では、日本では確かに多くの義務を従いながらも大きな安全を提供してくれている狭く結ばれた社会網からは離れられないということでもある。このように Kusamakura という概念は、寂しさや憂鬱さも含意しているのである。[22]

ここまで説明を施し、後は読者の想像力に解釈を委ねてみて、どこまでの理解が得られるかが問題となるのである。

『野分』にも英訳が存在するが、タイトルは Nowaki のままとなっている[23]。巻末解説の中にその説明が掲げられているので、見てみることにしよう。

nowaki という単語は（字義的には「野」＋「分ける、または分離する」）、春の初日である risshun から数えて 210 日目から 220 日目までの間に吹く秋風を指し、この間に農家の田畑は倒され、作物が荒らされる。現在の暦では、210 日目は 9 月 1 日頃、220 日目は 9 月 11 日頃であり、風や台風が激しくなり、危機的状況に陥る可能性のある時期なのである。[24]

季節感に関する捉え方は、地域によって大きく異なろう。日本のように四季が存在しなかったり、台風の訪れる季節が大きく異なる場合も想定されるため、このケースにあっては無理な訳出は危険と判断されたものと思われる。

『門』には 2 種類の英訳があるが、初訳者であるフランシス・マッシーは、表紙では Mon とのみ記し、第 1 章を始める前に Mon（The Gate）と改めて記載する[25]のに対し、ウィリアム・F・シブレイは The Gate と訳していて[26]、ここにもタイトルに対する態度の違いがうかがえる。

一方、漱石は『心』[27]という作品名に深い意味の拡がりを付与していると考えられる。それゆえにか、英訳[28]、ドイツ語訳[29]ではローマ字表記のまま、Kokoro がタイトルとなっており、英訳者は等しくこのタイトルを選択したことについて解説を付したのである[30]。

近藤いね子は作品名の翻訳について、以下のように述べている。

「心」という言葉は、翻訳するのに実に難しい言葉です。この一語のなかに、mind（知性）、heart（心臓）、soul（魂）、そして spirit（精神）という意味が、すべて含まれているようです。しかも、それは、単に、heart でも、soul でも、spirit でもないのです。この小説のフランス語訳［堀口大學、ジョルジュ・ボノ共訳『こゝろ』、パリ、1939 年］では、訳者はこう言っています。“the human heart” “ 人間的な心 ” というのが、漱石によるこの語の意味に、一番近いであろう、と。しかし、英訳者は、その言葉をそのまま残すのが一番望ましいと思いました。[31]

一方、エドウィン・マクレランは「私が接した日本語 *kokoro* の最適訳はラフカディオ・ハーンによる “the heart of things” というものである」[32] としている。また、メレディス・マッキニーは、前書きに続く「タイトルについて」と題する文章で、この単語が持つ響きについて次のように記している。

この小説のタイトルである *Kokoro* とは、複雑で重要な言葉である。人間的感情を持たない純粋な知性の働きとは異なり、“the thinking and feeling heart,”〔考え、感じる心〕と説明するのが最適である。人間の *kokoro* は、考えたり感じたりするものだから、“heart” という言葉は、ときに不適当な表現になる。しかしながら、*kokoro* という概念はこの小説全体に行き渡ったモチーフであるため、“heart” という一語で表現し、可能な限りその存在を翻訳に留めることを選んだ。タイトルは、原語のままが最もよいように思われた。[33]

タイトルひとつを取り上げてみても、翻訳者の工夫は様々に伝わってくることが分かるのである。

3　〈語り〉の調子・江戸っ子言葉をめぐって――『坊っちやん』から――

3．1　現代語訳と方言訳の存在

『坊っちやん』冒頭を見てみよう。漱石はこの作品を一筆書きのように二週間足らずで執筆したと言われるが[34]、冒頭から江戸っ子・漱石の巧妙な語り口で作品は始められる。

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分（じぶん）学校

の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。[35]

あたかも古風な江戸っ子を読者に印象付けるかのような語り口である。この冒頭に着目しただけで、中には「おれ」が東京出身の人物である様子を意識した読者もあったであろう。ここでは明治後半の東京言葉が、日本人にとってでさえ必ずしも当たり前の表現ではない状況に注目してみたい。

まず、一世紀を経た現代日本人読者にとってでさえ、いささか古めかしい言い回しが多数含まれている事実は、この作品の現代語訳が登場している事実が如実に物語っている。深澤晴彦はこの冒頭について、「親ゆずりの無鉄砲で子どものときから損ばかりしている。小学校では学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。」[36]と訳出するが、漢字使用箇所の一部が平仮名表記となり、また今日の常用漢字内での表現が目指されている状況がうかがえるのである。これはいわゆる標準語であるが、学校教育やマスメディアを通して広く日本人に獲得された表現であり、違和感は特にない。

しかしながら、日本でも地方ごとの方言は残っており、その語り方に慣れている読者があった場合には、東京と地方における言語表現の差異に着目したくなるはずである。

ここに今から半世紀前に作成された資料「全国実例方言集」[37]を紹介したい。これは『坊っちやん』の冒頭箇所を全国各地域の方言に「翻訳」すると、一体どのような表現になるかを記述したものである。全県の記述にまでは至っていないが、かなりの地域を網羅しており、同一県内で複数の地方方言にまで記述がなされている場合もある。振られたルビからは、音読すれば、かなり個性的な言い回しになっていたのではないかという事実が想像されるのである。大まかな傾向を示すために、全国北から南へ向けて、主な地域の表現を該当箇所に限って、引用してみよう。そうすれば、『坊っちやん』という作品の語り手が江戸っ子である様子が逆に浮かび上がってくるのである。言うまでもなく、各地方の方言に原文を翻訳することで原文が持つ地域性はより自覚化されることとなる。

方言訳

〈北海道〔南部漁村〕〉

親譲りの無鉄砲で小供の時がら損ばりしてる。小学校に居る時、学校の二階がら飛び降りで一週間ばり腰抜がしたごどある。(石垣福雄訳)

〈青森県〔弘前市〕〉

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばりしてる。小学校に居た時分、学校の二階から飛び降りて一週間ばり腰抜かした事あった。（此島正年訳）

〈宮城県〉

親譲りの無鉄砲で小供の時がら損ばりすてる。小学校に居だ時分学校の二階がら飛び降ずで一週間ばり腰抜がすたごどある。（加藤正信訳）

〈千葉県〔長生郡本納町〕〉

親譲りの無鉄砲もんで子供の時かい損ばいしてる。小学校の頃、学校ん二階かい跳んね降りて一週間ばい腰抜いた事がある。（野林正路訳）

〈埼玉県〉

親譲りの無鉄砲で小供ん時から損べえしてる。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ぐれえ腰抜かしたことがある。（外山映次訳）

〈長野県〔松本市周辺〕〉

親譲りの無鉄砲で小供ん時から損ばっかしてる。小学校に居る時分、学校の二階から飛び降りて一週間ばか腰う抜かした事ある。（馬瀬良雄訳）

〈岐阜県〉

親ね似た無鉄砲で小供ん時から損ばっかしとる。小学校ね居る頃ね二階から飛び降りて一週間ばか腰を抜かいた事がある。（谷開石雄訳）

〈京都府〔京都市〕〉

親譲りの無鉄砲で小供時から損ばっかりしてる。小学校に居るころ学校の二階から飛び降りて一週間位腰抜かしたことある。（遠藤邦基訳）

〈大阪府〔和泉地方〕〉

親譲りの無鉄砲でぇー、小供の時から損ばっかりしてんねーん、小学校に居てる時分やけど、学校の二階から飛び降りてぇー、一週間ほど腰抜かしたことあるわ。（土部弘訳）

〈兵庫県〔神戸市〕〉

小い時から無茶為いで損ばっかしや。わいの無茶は親譲りやねんな。小学校の時分や、学校の二階から飛び降りて腰抜かしてしもてからに一週間程立たれへなんだ。（和田実訳）

〈岡山県〔岡山市〕〉

親譲りの無茶くそで小供の時から損ばーしょーる。小学校へ居る時分、学校の二階から飛び降りて一週間程腰ーを抜かえーた事がある。（虫明吉次郎訳）

〈山口県〔熊毛郡上関町長島〕〉

親譲りの無鉄砲者でのー、小ー頃から損ばっかししちょるんじゃがのー。小学校へ行っちょる頃にのー、学校の二階から飛んでのー、一週間ばっかし腰ー抜かした事があってのー。（佐藤寅男訳）

〈愛媛県〔温泉郡川内町〕〉

親に似て無茶で小い時分から損ぎりしとる。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間位腰抜かしたことがある。（杉山正世訳）

〈高知県〔高知市周辺〕〉

親譲りの無鉄砲な者で、小供の時から損ばっかりしゅー。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ばー、腰ょ抜かしたことがある。（土居重俊訳）

〈福岡県〔糸島郡前原町〕〉

親譲の無鉄砲もなか子で小か時から損ばっかりしとる。小学校に行きよー時、学校の二階から飛び降りて一週間程腰ば抜かした事のある。（岡野信子訳）

〈熊本県〔熊本市近郊〕〉

親からの、無鉄砲者だけん、小供ん時分かる、損ばかっしとったい。小学校ん時い、学校ん二階からヒッ飛うで、一週間ばっかる腰ば違わきゃあ事んあっとたあ。（秋山正次訳）

〈宮崎県〔宮崎市〕〉

親んでかい無茶苦茶ぢぇ小もん時きゃい、損んばっかりしちょる。小学校に居っ時学校ん二階かり飛び降りちぇ一週間位腰抜かした事がある。（岩本実訳）

〈沖縄〔糸満〕〉

親譲からぬ、無鉄砲とぅ、小供しーんから損ぶかーんさっくん。小学校んかい居る時分、学校ん二階から飛ぅんがーに、一週間程まぶやー抜ちゃるくとぅぬあたん。（大城健訳）

マスメディアや通信機器の発達した現代では、標準語使用が進み、上述までの違いはなくなってきている。けれども、1969（昭和44）年になされた記録がこのような状態であるから、『坊っちやん』が発表された頃には、漱石の言葉、文体は東京以外の読者にとって、極めて新鮮に映った可能性がある。もしも、これらの方言訳につき、音声[38]による朗読資料が残っていれば、いかに異なる形で発話されていたかを知ることまでできたはずである。

隣県であってもかなり表現が異なっている状況は様々に観察できる。例えば、いわゆる首都圏に属する千葉県や埼玉県であっても、漱石の表現とはかなりの食い違いが生じている様子がうかがえる。また、関西圏でも、京都、大阪、神戸では表現に異なりが生じており、関西弁として一括りには到底できないし、九州各県でも相当に違った話し方がされていることがわかる。ましてや、本土復帰前の沖縄方言は、東京の言語使用者が聞いても、おそらくは理解できないくらいに、独特の言い回しであったと考えられるのである。

『坊っちやん』では、江戸っ子の主人公と松山方言の生徒が使用する言葉遣いの差が面白く描かれている。漱石は実際に松山中学で教鞭を執った際の記憶に基づいて生徒の語りを作品として表現したはずだが、確かに愛媛県訳は原文からかけ離れている様子がはっきりとうかがえるのであり、両者を並べてみると、発音上でも興味深い対照が観察できるのである。また、松山での教職を辞した漱石は、熊本の第五高等学校に赴任するが、熊本の方言はまた愛媛とは随分異なっていることがうかがえ、若き日の漱石が地方を転々とする中で、地域方言と東京語の違いに目覚め、その体験を作品執筆に活かした状況も想像できるのである。

３．２　「無鉄砲」で「腰を抜かした」〈坊っちやん〉をどう訳すか

それでは、この箇所に関する訳文を見てみよう。冒頭部の僅かなくだりだけでも「無鉄砲」や「腰を抜かした」など、翻訳に際し難易度の高い表現が存在するが、各翻訳者は一体どのように切り抜けているのだろうか。

英訳（毛利八十太郎訳）

Because of an hereditary recklessness, I have been playing always a losing game since my childhood. During my grammar school days, I was once laid up for about a week by jumping from the second story of the school building.[39]

〔親譲りの無茶のために私は子供の時からいつも負け戦をしている。小学校の時、一度校舎の二階から飛び降りて一週間くらい寝込んだ。〕

英訳（佐々木梅治訳）

A great loser have I been ever since a child, having a rash, daring spirit, a spirit I inherited from my ancestors. When a primary-school boy, I jumped down from the second story of the schoolhouse, and had to lie abed about a week.[40]

〔私は子供の時から全くのくだらぬ人間で、祖先から受け継いだ軽率で向こ

う見ずな精神を持っている。小学生だった時、校舎の二階から飛び降りて一週間ほど寝床にいなければならなかった。〕

英訳（アラン・ターニー訳）

Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me nothing but trouble.

Once, when I was at primary school, I jumped out of a second-story window and couldn't walk for a week.[41]

〔子供の時以来、遺伝的に受け継いだ無茶は私にもめごとしかもたらしていない。小学生だった時、二階の窓から飛び降りて、一週間歩けなくなった。〕

英訳（ジョエル・コーン訳）

From the time I was a boy the reckless streak that runs in my family has brought me nothing but trouble. Once when I was in elementary school I jumped out of one of the second-story windows and I couldn't walk for a week.[42]

〔子供だった時から家族伝来の向こう見ずなところは私にもめごとしかもたらしていない。小学生だった時、学校にある二階の窓から飛び降りて、私は一週間歩けなくなった。〕

英訳（マット・トレイバウド訳）

The reckless streak that runs in my family has kept me in trouble since I was a kid. In elementary school I jumped out of a second-floor window and hurt myself so badly I had to stay in bed for a week.[43]

〔家族にその傾向があった向こう見ずなところは私に子供の時以来もめごとの中に私を置いている。小学校で、私は二階から飛び降りて、ひどい怪我をし、一週間ベッドに横たわっていなければならなかった。〕

下線で示した箇所がそれぞれ対応する英訳とその訳し戻しであるが、いずれについても一対一対応する語彙を探し当てるに至ってはおらず、様々な工夫の痕跡が如実にうかがえる結果となっている。

また、文末表現についても触れておくと、「損ばかりして居る」とは過去からこの語りの執筆時点に至るまでのすべての時間においてという意味合いになる。英訳では毛利のみ現在完了進行形、他は現在完了形に訳されている。続く「腰を

抜かした事がある」とは過去の一時点における経験を指し示しており、英訳すべてが過去形を取っているが、日本語原文では「る」で終わっているため、その経験を回想する執筆時点の時間における語りが前景化する描かれ方となっているのである。

それではこの箇所、ドイツ語訳では、どのように訳されているのであろうか。

ドイツ語訳（アレキサンデル・スパン訳）

Aus anererbter Unbesonnenheit spiele ich seit meinen Kindheitstagen eine gar klägliche Rolle. Als ich noch in die Volksschule ging, sprang ich einmal aus dem ersten Stockwerk des Schulgebäudes und war ungefähr eine Woche lang gelähmt.[44]

〔親から受け継いだ軽率で私は子供の時から全くみじめな役割を演じている。また小学校に行っていた頃、一度校舎の上の階から飛び降りて、一週間ほど（体が）麻痺していた。〕

時制について述べると、「演じている」が現在形、「小学校に行っていた」が過去形、「飛び降りて」も過去形、「麻痺していた」は過去完了形で訳されている。

ドイツ語訳（ユルゲン・ベルント、篠原正瑛共訳）

Da ich von Natur aus unbesonnen bin, habe ich seit meiner Kindheit stets ein verlorenes Spiel gespielt. Als ich noch zur Volksschule ging, bin ich einmal aus dem oberen Stockwerk der Schule gesprungen. Dabei habe ich mir die Hüfte verrenkt und mußte eine Woche lang im Bett liegen.[45]

〔生来軽率なもので、私は子供の時からいつも見境のない遊びをしていた。まだ小学校に行っていた時に一度学校の二階から飛び降りた。その際に私は腰をねじ曲げ、一週間ベッドに横になっていなければならなかった。〕

時制は「遊びをしていた」、「入っていた」、「飛び降りた」、「腰をねじ曲げ」が現在完了形、「横になっていなければならなかった」が過去形となっている。このようにみると、ドイツ語では英語よりも時制に関する書き分けが細かくなされている様子が分かる。

語彙面では、「無鉄砲」はいずれも「軽率」と訳されるが、「腰を抜かした」についてはベルント、篠原訳が原文のニュアンスを残そうと努めている様子をうかがわせる訳文となっている。

このようにして各翻訳に接してみると、江戸っ子言葉をどう訳すべきか、翻訳者の様々な労苦が想像されるところである。

4　引用がもたらすもの――『草枕』から――

4．1　英文学引用における変容

『草枕』は、雅文調の文体が独特の輝きを発している。そこでは、語り手「余」の東西両文化への深い造詣の程が様々にうかがえるが、シェレー（Percy Bysshe Shelley）の詩「ひばりに寄す」（To a Skylark）の一節が英文で引用され、「余」が和訳を述べている。その和訳は漱石の手によるものであるが、文語体五七調で歌うように語られているのである。原文には、「前を見ては、後（しり）へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」[46] とあるが、これを読めば漱石の文語定型詩に対する素養の深さがたちどころに理解できる。

一方、同時に引用される「ひばりに寄す」の一節は以下のようであり、英訳ではそれのみが引用され、漱石による五七調の文語文訳は当然のことながら省略せざるを得ない。

We look before and after
And pine for what is not
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought. [47]

この詩を漱石は明治時代の知識人として、文語調に翻訳した。では、今一度、原詩を参照の上、現代語訳を試みるとすれば、どのような可能性があり得るであろうか。例えば、壺齋散人は次のような 5 行による翻訳を提案している。

現代語訳（壺齋散人訳）
前を見たり後ろを見たりして
我々はないものを探し求める
心から笑っているときも
我々は不安から逃れられない
どんなにやさしい歌の中にも悲しい思いが潜んでいる [48]

ここでは、現代日本語として平易な表現が目指されており、口語自由詩として訳されている様子が分かる。勿論、漱石が目指した文語定型詩とは対照的な仕上がりとなっているのである。

一方、クリストフ・ランゲマンは、この詩を英語で引用した後に、6 行のドイツ語に翻訳して示している。

ドイツ語訳（クリストフ・ランゲマン訳）

Wir schauen vorwärts und zurück
Sehnen uns nach dem, was nicht ist
Unser Lachen, und sei es noch so ehrlich
Ist immer auch von Leid durchwirkt
Unsere lieblichsten Lieder
Enthalten die traurigsten Gedanken.[49]

〔前後を眺め、
何もなき世界にあこがれる。
どんなに真なるものであっても、
笑いには悲しみが織り込まれている。
最愛の歌は
最も悲しむべき思いを含むのだ。〕

原文の最終行は、ここでは主語を取り立てて強調するかのように 2 行で表現されているのである。

４．２　漢詩引用によるエキゾチシズム

漱石が二松学舎にも学び、漢学の素養にも秀でていたことはよく知られているが、『草枕』には漢詩の引用も登場する。王維の詩「竹里館」からは、以下のような形で白文に漱石の書き下し文がルビとして添えられて記されているのである。

〔ひとりゆうこうのうちにざし〕〔きんをだんじてまたちょうしょうす〕〔しんりんひとしらず〕〔めいげつきたりてあいてらす〕
独坐幽篁裏、弾琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。[50]

勿論、訓読の方法は他にも考えられる。以下に口語訳も添えて一つの例[51]を挙げてみることとする。

書き下し文	口語訳
どくざす　いうくわうのうち	たかむらに　ひとりいて
だんきんし　また　ちやうせうす	ことかなで　はた　うたう
しんりん　ひとしらず	このはやし　ひとしらず
めいげつきたって　あひてらす	つききたり　てらすのみ

口語訳は詩の形式が五言絶句で歌うように記されていることが読者に分かるよう、五文字を二句で四行にまとめてある。このように詩の形式が言語間で異なる場合、いかにして定型詩の形を翻訳するかという問題が発生するのは、致し方のないところであろう。

英訳、ドイツ語訳では原文と書き下し文が併記されている様子を伝えるのは二度手間なので原文からの訳しか示し得ない。けれども、書き下しにこそ漱石の格調ある言葉の使用が見られるので、その妙味は消失を余儀なくされていると言わざるを得ない。

英訳（アラン・ターニー訳）

Seated alone, cloistered amidst bamboo
I pluck the strings;
And from my harp
The lingering notes follow leisurely away.
Into the dim and unfrequented depths
Comes bright moonlight filtering through the leaves.[52]

〔一人で座り、竹の中に引きこもる
私は弦をかき鳴らし、
また、私の竪琴から
徘徊する音色は悠長に絶えず続く。
ほの暗く、人跡まれな奥地
明るい月光が来て、葉に浸透する〕

英訳（メレディス・マッキニー訳）

Seated alone in a deep bamboo grove
I pluck my lute, I hum a melody.
Nobody knows me here within this wood,

Only the bright moon comes to shine on me.[53]
〔深い竹の木立にひとりで座り、
私はリュートをかき鳴らし、メロディーを歌う。
誰も私がこの森の中のここにいるとは知らず、
ただ明るい月だけが私を照らしにくるのだ。〕

ドイツ語訳（クリストフ・ランゲマン訳）

Allein sitze ich, verborgen inmitten eines Bambusdickichts
Zupfe Saiten, pfeife mir etwas vor
Tiefe Wälder, den Menschen unbekannt
Nur der Mond kommt und scheint mir ins Gesicht[54]
〔一人で私は竹の茂みの真ん中に身を潜め、
弦を爪弾きながら声を出す。
人も知らない深い森、
ただ月だけがやってきて私の顔を照らす。〕

こうしてみると、アラン・ターニーは6行詩で表現したが、メレディス・マッキニーとクリストフ・ランゲマンは絶句の形式を踏襲することに意を注ぎ、4行にまとめていることが分かるのである。

5 〈先生〉という言葉の響き――『心』から――

『心』は青年「私」が敬愛し、「先生」と呼ぶ年長の人物との交渉を深くしていく様子が描かれた作品である。そこに登場する日本語の先生という言葉は、年齢、性別、肩書如何に関わらず、使用できるという点で、英語やドイツ語の敬称とは趣きを異にしている。

冒頭箇所、まずは原文を掲げる。

私は其人(そのひと)を常(つね)に先生と呼んでゐた。だから此所(こゝ)でもたゞ先生と書(か)く丈で本名は打(う)ち明(あ)けない。是(これ)は世間(せけん)を憚(はゞ)かる遠慮といふよりも、其方(はう)が私に取つて自然だからである。私は其人(その)の記憶を呼び起(おこ)すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆(ふで)を執つても心持(こゝろもち)は同(おな)じ事(こと)である。余所々々(よそ〻く)しい頭文字抔(かしらもじなど)はとても使ふ気にならない。[55]

続いて、翻訳である。まずは、英訳を時代順に並べてみる。

英訳（近藤いね子訳）

I never called him anything else, so I will write about him here only as the *sensei* without mentioning his name, not because of any hesitation in doing so, but simply because the *sensei* comes naturally to my mind when I think of him. As for his initial I could never bring myself to resort to such an unfeeling manner of designating him.[56]

〔私は彼を決して他の呼び方で呼んだことがない。だから私は彼の名前に言及することなく、ただ先生としてのみ彼についてここで書くつもりである。これは名前を記すことへの躊躇からではなく、先生という呼び方はただ私が彼について考える時に心を自然にするからである。頭文字はと言うと、彼を称するのにそのような思いやりのない態度に訴えるように私自身を持っていくことは決してできなかった。〕

さて、近藤は sensei という語に以下のような脚注を添えている。

A Japanese word for teacher. But even the professors of a university are called *sensei* by the students.[57]〔教師を意味する日本語だが、大学教授でさえ学生から *sensei* と呼ばれている。〕

英訳（エドウィン・マクレラン訳）

I always called him “Sensei.” I shall therefore refer to him simply as “Sensei,” and not by his real name. It is not because I consider it more discreet, but it is because I find it more natural that I do so. Whenever the memory of him comes back to me now, I find that I think of him as “Sensei” still. And, with pen in hand, I cannot bring myself to write of him in any other way.[58]

〔私はいつも彼を先生と呼んでいた。だから、私は彼を単純に先生と呼び、本名では呼ばないつもりである。それは、私がそのようにすることがより思慮深いとみなすからではなく、そのようにすることがより自然だということに気づくからなのである。今になって彼の記憶が私に思い出されてくる度に、私は自らがまだ先生として彼のことを心に抱いていることに気づく。ペンを手にしても、私は他の方法で彼について書くよう自分自身を持っていくこと

はできないのである。〕

マクレランも、近藤と同様に脚注を記して説明を加えようとするが、ここではフランス語の方が原語に近い響きを持っていると解説されるのである。

The English word “teacher” which comes closest in meaning to the Japanese word *sensei* is not satisfactory here. The French word *maître* would express better what is meant by *sensei*.[59]〔英語の “teacher” は日本語の *sensei* の意味に最も近い単語ではあるが、ここでは相応しくない。フランス語の *maître* の方が *sensei* によって意味されるものをよりよく表現しているであろう。〕

確かに、マクレランが英訳を完成させた時点において、既にフランス語訳は出版されており、そこでは「先生」という語に対して maître という訳語があてられていた[60]。マクレランはこの様子を念頭に脚注を添えたと想像されるのである。

続いて、最新訳となるマッキニー訳に注目してみよう。

英訳（メレディス・マッキニー訳）

I always called him Sensei, and so I shall do in these pages, rather than reveal his name. It is not that I wish to shield him from public scrutiny——simply that it feels more natural. “Sensei” springs to my lips whenever I summon memories of this man, and I write of him now with the same reverence and respect. It would also feel wrong to use some conventional initial to substitute for his name and thereby distance him.[61]〔私は彼をいつも先生と呼んでいた。そこで、私はこの記録にあっても、彼の名前を明かすよりは同様にしたい。それは、公衆の監視から彼を保護したいからではなく、そうする方がより自然だからである。私はこの男性の記憶を思い起す時にも、今、同様の崇敬と尊敬の念を持って彼について書くにつけても、いつも先生という言い方が口から出るのである。何か紋切り型のイニシャルを彼の名前に代えて用いるのは間違っている感じもするし、そのために彼を遠ざけるようにするのも妥当ではないと思っている。〕

先生という語に関しては、前書きで以下のように記している。

Sōseki himself would have known well the disconcerting role of *sensei* to the

worshipful young. Usually translated as “teacher,” *sensei* is essentially a term of deep respect for one who knows; it implies a position of authority in relation to oneself that comes close to that of master and disciple.[62]〔敬虔な若者にとって *sensei* という役割が持つ違和感は、漱石自身もよく知っていただろう。通常は、“teacher” と訳されるが、*sensei* とは本質的に、物事を知っている人に対する深い尊敬の念を表す言葉であり、自分に対して師匠と弟子の関係に近い権威のある立場を含意するものである。〕

一方、ドイツ語訳では、オスカー・ベンルも先生という言葉をそのままローマ字表記で本文内に残したが、特段の解説は付さなかった。よって、ドイツ人読者はよく意味の分からないままに、この語をあたかも固有名詞の如くに受け止めたかもしれない。

ドイツ語訳（オスカー・ベンル訳）

Ich habe immer《Sensei》zu ihm gesagt. Daher will ich ihn auch hier so nennen und seinen Namen verschweigen. Das tue ich nicht etwa aus Scheu vor der Welt-ich kann gar nicht anders. Sobald ich mich an ihn erinnere, drängt sich mir das Wort《Sensei》auf die Lippen. Auch jetzt geht es mir so. Ich kann mich nicht dazu überwinden, kalte Initialen zu gebrauchen.[63]

〔私はいつも彼を先生と呼んでいた。だから、私は彼をここでもそう名付け、その名を明かさないつもりである。そのようにするのは、私の世間に対する物怖じのようなものからではなく、他には全くやりようがないからである。私は彼を思い出すや否や先生という単語が口をついて出てくる。今でもなおそうである。私は冷ややかなイニシャルを使用する気にはなれないのである。〕

それから 40 年余りを経て、翻訳者ベンルに代わって、日本研究者のカロリン・フライシュアー（Carolin Fleischer）が重版出版に際して、巻末注（Anmerkungen）を作成した[64]。その中には、先生という言葉に関する説明として、以下のような記述を見出せる。

In wörtlicher Übersetzung bedeutet *sensei*《Lehrer》oder《Lehrmeister》und wird

als höflich-respektvolle Anrede für Lehrer, Professoren, Ärzte, Anwälte und Künstler verwendet. Der Begriff *kokoro* steht für Emotionalität und lässt sich mit《Herz》,《Seele》oder《Gemüt》übersetzen.[65]〔字義的な翻訳では、*sensei* は「教師」や「教師の大家」を意味し、教師、医師、弁護士や芸術家のための礼儀正しく尊敬に満ちた呼称として用いられる。*kokoro* という概念は感情を代表するもので、「心」、「魂」または「気性」と訳されるものである。〕

しかしながら、この作品に登場する先生は職業を持ってはいない。そのような人物になぜそれほどにまで敬意の高い表現が用いられるのかという疑問がドイツ語圏の読者に生じる可能性は残されているように感じられる。

6　おわりに

日本独特の文化的背景を持った言語表現を外国語で書き表すのが至難の業である事実は言を俟たない。最も異文化的要素が込められた箇所の翻訳には、代償としての変容が付きまとう。読者が外国文学の翻訳を手に取る時、異文化を理解したいという欲求に突き動かされている場合は多い。だから、原文と訳文の間に介在するずれへの想像力を喚起し得るような形への翻訳が求められるのである。

一見そっけない書名（タイトル）は作品世界を凝縮し、象徴的に表現するが、翻訳においては等価となる語彙になかなか恵まれない。よって、音訳される場合、原語から多少ずれても目標言語の母語話者に受容されるよう意訳される場合のいずれであっても、解説でその意の記述が求められる。

漱石は、『坊っちやん』に代表されるように、明治期における江戸っ子の文体で主に執筆するが、一世紀を経た現代の感覚では読解に苦慮する表現も見受けられる。そのため、現代語訳が試みられもするが、半世紀前にはまだ方言との文体や発音の落差も激しかった。英語やドイツ語では、一体どの地域の言葉に移し変えるのが適当なのかという問題に翻訳者は直面する。また、意味の拡がりが独特な語彙は、翻訳に適さないため、音訳され、注釈等でその意図するところを解説する形がとられるのである。

漱石は英文学の素養が深かった。その状況がよく現われていたのは、『草枕』に登場する英詩の引用とその和訳の提示であった。しかしながら、翻訳では漱石が五七調の格調高い和文に翻訳する力量を持っていた様子を示し得ない。漱石は漢学の素養にも恵まれており、その様子も『草枕』における五言絶句の引用並びにその詩を書き下し文にしている箇所によく現われているが、漢文訓読の品格は

翻訳では喪失されてしまっている。

日本語特有の含蓄を持った言葉を外国語に置き換えるのは困難を極めるがために、そのままローマ字表記で記さざるを得ない場合がある。この事情は『心』という作品名やそこに登場する「先生」という敬称で呼ばれる人物のニュアンスを表現するのに各翻訳者が戸惑っている様子からたちどころに理解された。

以上のような限界を抱えながらも、翻訳という営みは作品が発表されて以来、脈々と行われてきている。本稿で示し得たのは、その現場の一端に過ぎないが、原文に加えて翻訳をも通してこそ感じ取れる漱石独特の文体に言及してみた。

このような考察は、他の作家・作品・言語についても当然可能である。グローバル化が進展した現代にあって、翻訳研究によって得られる知見から学べる視野は小さくないはずである。

付記

英訳文とドイツ語訳文の後に〔　　〕として付した訳し戻し文はすべて拙訳による。

注

1　例えば、福田秀一『海外の日本文学』（武蔵野書院　1994 年 4 月）、伊井春樹編『国際化の中の日本文学研究　国際日本文学研究報告集 1』（風間書房　2004 年 3 月）などから、国際的視野における日本文学研究の在り方に関して知見を得ることができる。

2　日本文学が海外にまで広く流通している近年の様子に関しては、河野至恩、村井則子編『日本文学の翻訳と流通　近代世界のネットワークへ』（勉誠出版　2018 年 1 月）に詳しい。

3　翻訳で日本文学に接する海外読者の受容研究を志した成果には、伊井春樹編『日本文学　翻訳の可能性　国際日本文学研究報告集 2』（風間書房　2004 年 5 月）、牧野成一『日本語を翻訳するということ　失われるもの、残るもの』（中央公論新社　2018 年 6 月）などがある。

4　辻由美『世界の翻訳家たち　異文化接触の最前線を語る』（新評論　1995 年 9 月）では翻訳者の様々な労苦が取材されている。

5　出版順に主だった研究を掲げると、中山眞彦『物語構造論　『源氏物語』とそのフランス語訳について』（岩波書店　1995 年 2 月）、平野栄久『ドイツと日本の戦後文学を架ける』（オリジン出版センター　1997 年 4 月）、北条文緒『翻訳と異文化　原作との〈ずれ〉が語るもの』（みすず書房　2004 年 3 月）、伊井春樹編『海外における源氏物語の世界　翻訳と研究　国際日本文学研究報告集 3』（風間書房　2004 年 6 月）、畑中千晶『鏡にうつった西鶴　翻訳から新たな読みへ』（おうふう　2009 年 12 月）、大澤吉博『言語のあいだを読む　日・英・韓の比較文学』（思文閣出版　2010 年 7 月）、緑川真知子

『『源氏物語』英訳についての研究　翻訳された『源氏物語』の捉え方についての細密なる検証』（武蔵野書院　2010 年 9 月）、土田久美子『ロシア語訳『源氏物語』の研究〈語り〉・和歌・もののあはれの観点から』（関西学院大学出版会　2015 年 12 月）などがある。また、日本比較文学会創立 60 周年記念論文集編集委員会編『越境する言の葉世界と出会う日本文学』（彩流社　2011 年 6 月）にも日本文学の外国語訳文献目録が付されている。

6　フェリス女学院大学日本文学国際会議実行委員会編『世界文学としての夏目漱石』（岩波書店　2017 年 3 月）は近年の海外における夏目漱石作品受容の状況をまとめた文献として見逃せない。

7　漱石作品の英訳出版状況は、徳永光展「夏目漱石『心』における英訳の変遷」（郭南燕編「世界の日本研究 2017　国際的視野からの日本研究」国際日本文化研究センター 2017 年 5 月）で概観の上、主な長編作品が既に翻訳出版されている事実を確認した。

8　本稿で取り上げる『吾輩は猫である』『草枕』『心』の他、主だった作品としては以下に記すように『夢十夜』『坑夫』『三四郎』『それから』『硝子戸の中』が翻訳出版されている。

Natsume Sôseki. *Träume der zehn Nächte* übersetzt von Heinz Brasch. In: *Yamato. Zeitschrift der deutsch-japanischen Gesellschaft* (Berlin) 1931, Heft 4, s.181-193, Heft 5, s.228-239; in Paul Haß und Binko Matsuoka(Hg.): *Geschichten und Erzählungen aus Japan*. Fikentscher, Leipzig, 1937, s.197-229.

Natsume Sôseki. *Träume der zehn Nächte* übersetzt von Heinz Brasch, überarbeitet von Margarete Donath. In: Margarete Donath(Hg.): *Japan erzählt*. Fischer, Hamburg, 1969, s.12-31.

Natsume Sôseki. *Träume aus zehn Nächten* übersetzt von Jürgen Berndt. In: Jürgen Berndt(Hg.), *Träume aus zehn Nächten. Moderne japanische Erzählungen*. Aufbau Verlag, Berlin, 1975, s.71-96; in: *Träume aus zehn Nächten. Japanische Erzählungen des 20. Jahrhunderts*. Ausgewählt und mit einem Nachwort versehen von Jürgen Berndt. Theseus Verlag, Zürich, 1992 (Zürcher Reihe japanische Literatur), s.63-85.

Natsume Sôseki. *Träume aus zehn Nächten* übersetzt von Sven Heuberger, Herstellung und Verlag BoD, Norderstedt, 2015.

Natsume Sôseki. *Der Bergmann* übersetzt von Franz Hintereder-Emde, be.bra verlag, Berlin, 2016.（後に DuMont Buchverlag GmbH&Co.KG, Köln, 2018 にて再版）

Natsume Sôseki. *Sanshiro* übersetzt von Christoph Langemann,Theseus Verlag, Zürich, 1991.（後に *Sanshiro's Wege*, be.bra verlag, Berlin, 2009 として再版）

Natsume Sôseki. *Und dann* übersetzt von Ryôichi Iwano und Rose Takahashi, Doitsu bunka kenkyûsho, Kyoto, 1943.

Natsume Sôseki. *Hinter der Glastür* übersetzt von Christoph Langemann, Angkor Verlag, Frankfurt am Main, 2011.

9　Natsume Sôseki. *I am a cat I, II, III* translated by Aiko Ito and Graeme Wilson, Tuttle, Tokyo, 1972, 1976, 1986.（後に *I am a cat*, Tuttle, Tokyo, 2002 として 3 巻が合本化の上で再版された。）

10　Natsume Sôseki. *Ich der Kater* übersetzt von Otto Putz, Insel Verlag, Frankfurt am Main und Leipzig, 1996.（Insel Taschenbuch として 2001 年に再版）

11　夏目金之助『漱石全集　第一巻』岩波書店　1993 年 12 月　3 頁

12　注 9 2002 p. 3

13　注 10 1996 s.7

14　中村吉広『チベット語になった『坊っちゃん』 中国・青海省　草原に播かれた日本語の種』（山と渓谷社　2005 年 12 月）では、著者がチベット語訳作成に協力した際にどのような問題に直面したかが具体的に描かれており、興味深い。また、『坊っちゃん』の翻訳に関する主な研究を時代順に列記すると、以下のようになる。

筧寿雄「ばった騒動記　漱石「坊ちゃん」の英訳について」、「神戸大学文学部紀要」第 5 号　神戸大学文学部　1976 年 1 月

鈴木雅光「『坊っちゃん』日英表現比較（一）」、「東洋」第 11 号　東洋大学通信教育部　1990 年 11 月

鈴木雅光「『坊っちゃん』日英表現比較（二）」、「東洋」第 12 号　東洋大学通信教育部　1990 年 12 月

徳永光展「ドイツ語訳『坊っちやん』考　*Der Tor aus Tokio* を読む」、「比較文学」第 39 巻　日本比較文学会　1997 年 3 月

徳永光展「『坊っちやん』にみる日本　独訳 "*Der Tor aus Tokio*" をめぐって」、関一雄編『一の坂川・姫山　国語国文論集』笠間書院　1997 年 5 月

溝渕園子「ロシアが見た「坊っちゃん」」、日本比較文学会創立 60 周年記念論文集編集委員会編『越境する言の葉　世界と出会う日本文学』（彩流社　2011 年 6 月）、後に溝渕園子『〈翻訳〉の文学誌』（群像社　2020 年 2 月）に再掲。

Tokunaga Mitsuhiro, Case Study of Comparative Modern Japanese Literature English Translation: Sôseki Natsume's Botchan, *Comparatio* Vol.16　九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会　2012 年 12 月

堀部秀雄「「日本文化」は英語でどう表現できるか？　『坊ちゃん』の三種類の翻訳における翻訳方略に関する一考察」、「日英言語文化研究」第 5 号　日英言語文化学会　2016 年 9 月

15　Natsume Sôseki. *Botchan (master daring)* translated by Yasotaro Morri, Ogawa Seibundo, Tokyo, 1918. (Revised by J.R.Kennedy,1919, Kessinger Legacy Reprints)

Natsume Sôseki. *Botchan* translated by Umeji Sasaki, Tuttle, Tokyo, 1968.

Natsume Sôseki. *Botchan* translated by Alan Turney, Kodansha International, Tokyo. New York. London, 1972.

Natsume Sôseki. *Botchan* translated by Joel Cohn, Kodansha International, Tokyo. New York. London, 2005.

Natsume Sôseki. *Botchan* translated by Matt Treyvaud, Ray Ontko & Co, Richmond, 2009.

16　Natsume Sôseki. *Botchan (Ein Reiner Tor)* übersetzt von Alexander Spann, Kyodo Verlag, Osaka,1925.

Natsume Sôseki. *Botchan (Der Tor aus Tokio)* übersetzt von Jürgen Berndt und Shinohara Seiei, Aufbau Verlag, Berlin und Waimar, 1965.（後に Theseus Verlag, Zürich und München, 1990、並びに Angkor Verlag, Frankfurt am Main, 2010 にて再版）

17　Natsume Sôseki. *The Three-Cornered World* translated by Alan Turney, Tuttle, Tokyo, 1968.

18　Natsume Sôseki. *Das Graskissen-Buch* übersetzt von Christopf Langemann, edition-q Verlag, Berlin, 1996.（後に be.bra verlag, Berlin, 2011 にて再版）

19　Natsume Sôseki. *Kusamakura* translated by Meredith McKinney, Penguin Books, London, 2008.

20　注 17 p.10

21 注 19 p.xv
22 注 18 s.201
23 Natsume Sôseki. *Nowaki* translated by William N.Ridgeway, Center for Japanese Studies, The University of Michigan, Ann Arbor, 2011.
24 同上　p.112
25 Natsume Sôseki. *Mon* translated by Francis Mathy, Tuttle, Tokyo,1972.
26 Natsume Sôseki. *The Gate* translated by William F. Sibley, Nyrb, New York, 2013.
27 夏目漱石『漱石自筆原稿『心』』（岩波書店　1993 年 12 月）の表記に従い、『心』と本稿では記載する。
28 Natsume Sôseki. *Kokoro* translated by Ineko Sato, Hokuseido, Tokyo, 1941.（初版は旧性・佐藤いね子の名で 1941 年に北星堂より出版され、その後 1948 年より新姓・近藤いね子の名で研究社より版を重ねた。2018 年になって、誤植を訂正の上、国書刊行会より復刊された。）
Natsume Sôseki. *Kokoro* translated by Ewin McClellan, Henry Regnery Company, Chicago, 1957. 引用は Tuttle, Tokyo, 1969 の版による。
Natsume Sôseki. *Kokoro* translated by Meredith McKinney, Penguin Books, London, 2010.
29 Natsume Sôseki. *Kokoro* übersetzt von Oscar Benl, Manesse Verlag, Zürich, 1976.
30 なお、『心』というタイトルの翻訳状況については、徳永光展「原作と翻訳のすきまは埋められるか　夏目漱石『心』にみる日本文化の表現」（「比較文学・文化論集」第 34 号　東京大学比較文学・文化研究会　2017 年 3 月）に考察がある。
31 近藤いね子（星野美賀子訳）「夏目漱石と『こゝろ』について」、注 28 の近藤（2018 年版）243 頁
32 注 28 McClellan p.vi
33 注 28 McKinney p.xii
34 夏目漱石『直筆で読む「坊っちやん」』（集英社　2007 年 10 月）を見ると、書き損じも少なく、漱石が一気に原稿を仕上げた様子がうかがえる。荒正人の調査によれば、1906（明治 39）年 3 月 14 日頃、突然に構想を得、同 17 日前後から書き始めて、23 日には既に 109 枚（全 149 枚中）まで執筆するほどだったとのことである（荒正人『漱石文学全集　別巻　漱石研究年表』集英社　1974 年 10 月 252-253 頁）。同作品は 4 月 1 日に「ホトトギス」にて発表された。
35 夏目金之助『漱石全集　第二巻』岩波書店　1994 年 1 月　249 頁
36 夏目漱石（深澤晴彦訳）『現代語で読む坊っちゃん』理論社　2012 年 11 月　8 頁
37 〔無記名〕「全国実例方言集　夏目漱石「坊っちゃん」冒頭部分の各地方言訳」、「国文学　解釈と鑑賞」第 34 巻第 8 号〔通巻第 423 号〕至文堂　1969 年 7 月 333-357 頁
38 『坊っちやん』については、風間杜夫朗読による『新潮カセットブック　夏目漱石　坊っちゃん　上巻・下巻』（新潮社　1994 年 12 月）が制作されている。
39 注 15 Morri Kessinger Legacy Reprints, p.4
40 注 15 Sasaki p.13
41 注 15 Turney p.9
42 注 15 Cohn p.13
43 注 15 Treyvaud [Kindle] Chapter One
44 注 16 Spann s.1
45 注 16 Berndt und Shinohara 1990 s.5

46　夏目金之助『漱石全集　第三巻』岩波書店　1994 年 2 月　7 頁
47　注 17 p.17、注 19 p.7
48　https://poetry.hix05.com/Shelley/shelley11.skylark.html（検索日 2021 年 9 月 30 日）
49　注 18 s.11
50　注 46 10 頁
51　小林太市郎、原田憲雄『漢詩大系　第十巻　王維』集英社　1964 年 8 月 329-330 頁
52　注 17 p.20
53　注 19 p.9
54　注 18 s.15
55　夏目金之助『漱石全集　第九巻』岩波書店　1994 年 9 月　3 頁
56　注 28 近藤（2018 年版）9 頁
57　同上
58　注 28 McClellan p.1
59　同上
60　Natsume Sôseki. *Le pauvre cœur des hommmes* traduit du japonais par Horiguchi Daigaku et Georges Bonneau. Institut International de Coopération Intellectuelle, Paris, 1939.（後に Gallimard, Paris, 1957 にて再版）
61　注 28 McKinney p.3.
62　同上 p.x
63　注 29 s.9
64　Natsume Sôseki. *Kokoro* übersetzt von Oscar Benl, Manesse Verlag, Zürich, 2016. s.357-365.
65　同上 s.357